

川
端
康
成

遠
川
旅

河内書房

川端康成

遠
い
旅

河内書房

遠い旅

定価一、五〇〇円(本体一、四五五円)

平成二年一月三十一日 処女版発行

著者 川端康成

絵 岩田 専太郎

発行者 池田 倫子

発行所 河内 書房

〒578 大阪府東大阪市菱江四二〇

電話 〇七二九―六四―四九七〇
振替 大阪三―一〇八四三五

印刷所 株式会社 ミラテック

© 1990 Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします。

ISBN 4-906363-01-6

遠

い

旅

目

次

見つめる少女	1
銀座での疑い	9
廻転いす	16
もくせいの家から	25
電話の誘い	32
来ている客	42
きょうだい思い	49
店開き	57
叫び声	65
伊豆の母	72
自分の幻	81
夜の酒	89
明くる朝	96
事件の後	101
笑い声	108

女のいのち	ゆくひと	わかれみち	薄日	雨	この時間	軽井沢	運転手	三人で	伊香保から	満開のばら	暗い廊下	ある婦人	人ちがい	花の季節
-------	------	-------	----	---	------	-----	-----	-----	-------	-------	------	------	------	------

208	204	197	189	184	176	170	163	156	149	142	136	129	121	116
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

見つめる少女^{しょうじょ}

「ここでもいいわ。ありがとう。」

田園調布^{でんえんちょうふ}の駅を出ると、さつきは雅夫^{まさお}に言った。

「一人で帰れるわ。」

「君、一人で帰れるって、これで三度言ったよ」と、雅夫は笑った。

麻布六本木の俳優座劇場^{はいゆうざ}を出た時に一度、二度目は渋谷の駅で、そして、今が三度目だ。

「一人で帰れるのはわかってるさ。子供じゃないもの……。」

さつきもほほ笑んだ。

二人は銀杏並木の坂をのぼって行った。高い銀杏のしげりに、夜の暗さがこもって、二人をつつむようだった。まだ青を残した葉が、足もとに散り落ちている。昼の光りで見れば、黄ばんでいるのだろう。

「いい匂いだな。なんの花だろう。」と、雅夫は聞いた。

「銀もくせいよ。今朝……。」と、さつきは言いかけてしまった。

今朝、さつきが坂をおりながら、もくせいの匂いに振り向くと、花の木の下に、少女が立っていた。そのひとは大きい目で、さつきを見つめているのだった。さつきははっとした。通り過ぎてからも、後姿を見つめられている感じだ。その少女の目が、どこまでもさつきについて来るようだった。

そのことを雅夫に話そうとしたのだが、少女のふしぎな印象をなんと云えばいいのだろうか。

まがきの奥の高い闇に、もくせいの大木が浮んでいる。白く小さい花の群れは、ほのかに見えるか見えないかだ。夜の方が匂いは強いようである。

「こんなところに、大きいもくせい、前からあった？」

雅夫は小学校の時、この近所に住んでいたのだった。

「あったわ。」

「そうかなあ……。気がつかなかったな、あんなに匂う花なのに、変だなあ。」

「あたしも、あのひとのいることは、気がつかなかったわ。」

「あのひとつて？」

「今朝会ったひと……。」

「……？」

「あたしぐらいの年の、きれいなひとがあこのうちにいるの。」

通り過ぎてからもしばらく、銀もくせいの匂いはただよっていた。

坂をのぼりきると、さつきの家も見える。

ピアノの音が聞えて来た。

「いい夜だなあ。僕にはなつかしい土地で、もくせいが匂って、ピアノが聞えて……。」

送って来てよかった。」

さつきはうつ向いていて、答えなかった。

「あれ？　ねえ、なんの曲？　同じところをくりかえして、練習してるの？」

雅夫より先きに、さつきはそのことを気づいていた。母の美也子（みやかこ）が弾いているのだ。

さつきは日曜ごとに、ピアノの稽古（けいこ）に通っている。昨日のレッスンの終りの方で、さつ

きがくりかえしつかえたところに、教師の柏木（かしわぎ）が印（しるし）をつけた。家に帰って、夕食後、さつ

きがさらっているところへ、美也子（みやかこ）がはいって来た。

「その青鉛筆のしるし、柏木先生がおつけになったの？」

楽譜がくふをのぞかれて、さつきは赤くなった。

「そこ、よく弾けなかったのね？」

「ええ。」

さつきの指はなおぎこちなくなった。

昨日きのう、さつきがつかえたところを、あの青鉛筆のしるしのところを、今、母ははがくりかえし弾ひいているのだ。

「……？」

さつきはつい急ぎ足になっていた。

「どうかしたの？」と、雅夫がいぶかったほどだった。

さつきの横顔は青白かった。

「なんだ、ピアノは君のうちか。誰が弾ひいているの？」

「……？」

雅夫はさつきの家に近づいては悪いと思ったのか、

「じゃあ、僕はここで……。」

「さようなら、どうもありがとう。」

雅夫はさつきの右手をとった。さつきが引っこめようとすると、雅夫はさつきの指のあいだに自分の指を入れて、一息、強く握った。さつきはその軽い痛みを、声に出しそうだった。

「さようなら。」と、雅夫は手を大きく振るようにはなした。

さつきは門をはいりながら、雅夫に握りしめられた指を一本一本、左手でこすっていた。なにかがはりついたような、気味悪いぬくもりは、取れそうになかった。

呼鈴を押すと、ピアノの音はやんだようだったが、すぐにまたつづいた。玄関の扉がなかから開いて、さつきを迎えたのは、父の俊助だった。

「あら、お父さま？」

「お帰り。」

父を一目見ると、書斎で勉強をしていた顔だと、さつきにはわかった。その二階の書斎から、おりて来てくれたのだ。

母は玄関脇の応接間で、ピアノを鳴らしている。

俊助はさつきがしめた扉に目をやりながら、

「ひとりで帰って来たの？」

「ええ。」

とつさにさつきは答えてから、言い直した。

「いいえ。橋本さん、雅夫さんが、家の前まで送って来て下さったの。」

「橋本さんて……？」

「お父さまはおぼえていらっしやらないわ、きっと。小さいころ、二三度遊びに見えただけですね。小学校のお友だちです。」

「家が近いのかい。」

「いいえ。小学校のころはそうでしたけど、お父さまが名古屋へ転勤なさったんです。今は雅夫さんが大学にはいって、練馬の方に下宿してらっしゃるの。」

「そうか。あがってもらえばよかったのに。」

俊助の少し猫背ねこぜの後姿が、階段をのぼるのを、さつきは目で追いながら、
「お父さま、お仕事なさってたんでしょう？」

「いや、講義の下調したしべさ。」

俊助は私立大学の文科の、歴史の助教授をしているのだった。

さつきは洗面所へ行った。父は夕食の後に、歯をみがく習^{なら}わしで、不器用に白い瀬戸の手洗いをよごしているばかりでなく、足もとの床にも、水をずいぶん飛ばして濡^ぬれさせていた。

さつきは雅夫に握られた右手を、なんども石鹼で洗った。

そのまま、自分の部屋へ行^ゆこうとして、応接間の母が、やはり気になって、引きかえした。

「ただ今。」

「おや、お帰りなさい。」

美也子は振り向いたが、ピアノの手は休めなかった。

さつきは息をつめて、母の若やいだ首筋に目を注いだ。首筋を大胆に見せた、ワンピイスである。このごろの母は、目立って若返ってゆくようだ。

もともと若い母だった。一人子^{ひとりっこ}のさつきと十九しかちがわない。

「お芝居、おもしろかった？」

「ええ。」

「かおるさん、上手だった？」

「とても、よかったわ。」

「かおるさんはこのごろ、ちっともうちへ見えないわね。」

「おいそがしいのよ。」

「わたしも見たいわ、かおるさんの舞台。」

「見てあげて、お母さま。あの新劇団、若い人たちばかりの、研究会でしょ。一枚でも切符が売れば、助かるのよ。」

「かおるさんのお兄さん……、なんて言いましたっけ？　そう、研一けんいちさんだったわね。研一さんもいらしてた？」

「いいえ。」と、さつきははつきり首を振った。

「いらしてなかったわ。」

さつきは劇場で、研一をさがしていた自分を思い出した。来ないとわかっている研一が、来ていそうな気がして、芝居が終るまで、さつきは落ちつけなかったものだ。

母に研一のことを聞かれて、さつきは自分の言いたいことを、ふとためらった。楽譜に青鉛筆の印をつけたところを、母がなぜくりかえして弾くのか、さつきはやめてもらいたくて、応接間へは行って来たのだった。

銀座ぎんざでの疑うたがい

かおるがさつきと会う時は、たいてい、東京駅の八重洲口やえすぐちで待ち合わせようと言って来る。名店街のいろんな店などがあつて、二人のどちらかが、少しおくれても、早く来ても、店をながめて歩いていればいいからかもしれない。

さつきが改札口を出ると、修学旅行らしい、高校生の一団が休んでいた。そして、駅の出入りの人波は、いつもほどこいそがしげでなく、目立って子供づれが多かった。

「日曜日だからだわ。」

さつきはかぜをひいて、一週間も学校を休んでいたの、日曜日なのをうっかりしていた。

かおるは約束の時間ぴったりに来た。

「からだ、どう？」

「もう、いいの。でも、出かけるの一週間ぶりよ。」と、さつきは額ひたいに手をやってみて、

「熱が高かったのよ。」

「少しやつれてるわね。秋の少女らしくなったわ。」と、かおるはさつきの顔をのぞきこみながら、

「俳優座でうつつたんだと、悪いわね。かぜひきのお客も多かったでしょうから。」

「そうじゃないわ。」

俳優座に行った、翌々日の午後から、寝ついたのだった。かぜの悪寒おかんのなかで、さつきは銀もくせいあたたの家の少女や、雅夫に握られた指の感じや、母の弾くピアノの音などを、くりかえし思い浮べていた。どれもが気にかかってならないのだった。かぜの熱で指先きまでだるいのは、ま温かい雅夫の指がからみついているかのようだった。銀もくせいの家の少女には、あの明くる朝も、また会った。坂をおりて来るさつきを、やはりじいっと見つめていただけだったけれども、さつきは胸騒むさわぎがして、顔がかたくなるほどだった。



ただ通りがかりの人を見ているだけの目とは思えない。なにか訴えて、なにか話したそうだった



た。

きつきが気になった三つのことのうち、かおるに話せるのは、その少女のことだけだった。しかし、少女の印象は、言葉では人に伝えにくかった。

「その人ににらまれたんで、かぜをひいたのかな？」と、かおるに笑われてしまった。かおるはよく男のような口をきく。そういう時は、歩き方も男のようだった。

「あたしは知らないひとなのよ。それなのに、あたしに忘れられるのがかない、というような